

# 信 毎 俳 壇

## 神野 紗希 選

空爆は怖つと少年息白し (松本市) 竹内 京子  
 戦もて薄るる戦日記買ふ (長野市) 原田 浩生  
 音消したテレビ見ながら夜食喰う (下諏訪町) 中村 久  
 額に血自然薯を握るひたすらに (長野市) 中沢 義寿  
 朝霧や古城に集ふ少年兵 (松本市) 伊藤 和夫  
 ガザの子のミサンガ悲し秋の雨 (富田村) 金本 牧子  
 冤罪や風に吹かれる枯木 (飯綱町) 神谷 晋  
 新割りの餅の遊ぶ小春かな (箕輪町) 向山 政俊  
 飛べさうで飛べぬ小川や草の花 (辰野町) 矢島あさ子  
 珈琲の豆補充せり「Jingle Bells」 (塩尻市) 藤森 円  
 秋深し妻と落ち合うジャズ喫茶 (下諏訪町) 木口 碧  
 ささくれし手にオリブを秋収め (長野市) 曲淵けいを

選 評

一句目、「怖つ」というしゃべり言葉が、戦争を知らない少年の率直な感想を書きとめた。息の白さも生きている証。二句目、連日のガザの惨状に心を痛め、同時にウクライナの報道が減った現状も思

う。新たな戦争が上書きされる人間の愚。せめて忘れまいと、日々記したい。三句目、深夜、周囲に配慮し、テレビを無音にして夜食をば。生活の中のふとした孤独。四句目、「額に血」がリアルに迫る。

## 坊城 俊樹 選

頬杖は老いを支へて秋の雨 (安曇野市) 丸山 進也  
 ガラスからガレの蟻螂出られずに (伊那市) 中村 茂子  
 獣道のしき昏さを覗く秋 (埼玉県美里町) 飯野佳代子  
 歳取つて小さくなつて冬に入る (小海町) 依田 久代  
 菊の香や黒き古城に位あり (松本市) 小林 幸平  
 綿虫を大きく見せてゐる夕日 (長野市) 井出 節子  
 お朝事の大門開きて冬の音 (長野市) 宮沢 信博  
 秋惜しむ湯屋より聞こゆ湯もみ唄 (立科町) 村田 実  
 三代の女子いそいそ七五三 (佐久市) 木内利一郎  
 沈む陽に曳かれて行くか赤蜻蛉 (飯田市) 吉沢 奨  
 アルプスの夕日を返す柿すだれ (伊那市) 中村 初治  
 立冬の空気の重み背に歩む (坂城町) 宮下 和夫

選 評

一句目、頬杖をつくのは妙齡の女性が定番だが老いた人も悪くない。あたかも老いを支えているように見えるが秋の雨を眺める姿は深淵で哲学的ですらある。二句目、この蟻螂はガレの作品に描かれ

た物だろう。生きていた蟻螂をそのまま閉じ込めたような神秘を感じる。三句目、作者はいつの間にか森の中の獣道に紛れ込んでしまった。そこにある昏さと神秘さがひしひしと伝わって来る。

## 今井 聖 選

雄弁な夫の山靴初紅葉 (塩尻市) 長 三枝子  
 人類の怖しと思ふ夜寒かな (千曲市) たしまたける  
 犬迎ふ準備しまつてま冬うらら (小海町) 依田 久代  
 秋天や青に隠るる闇深く (長野市) 井出 靖  
 石叩丸き石より叩き初む (塩尻市) 古舘 林生  
 日向臭き十一月の煎じ薬 (長野市) 荻原 宏祐  
 文化の日呼び出し電話のありし頃 (佐久市) 佐藤千栄子  
 朝寒や血圧測り直したる (須坂市) 牧野 勇水  
 霜の香や国主仁科神明宮 (長野市) 武田 芳子  
 キャタピラにへばりつきたる銀杏の美 (松本市) 伊藤 和夫  
 妻より孫より曾孫より小春日よ (佐久市) 松瀬 孝雄  
 レトルトの横須賀カレー文化の日 (佐久市) 佐藤 勝子

選 評

一句目、年季の入った夫の登山靴が夫の全てを象徴している。たくましくがむしゃらで頑固、そして丸い部分もある。二句目、冬の夜にふと人間という存在の怖ろしさを思った。人間はその知識を使

って何をしてきたのか。三句目、子犬がわが家の一員となる日、準備万端怠りなく到着を待っている。四句目、秋空の青さのかなたにいかなる闇が隠されているか。作者は地球の現実の状況を嘆いている。